

ローマ法王様に謁見記

ペトロ岐部のこと

相原 範子

一九九五年十一月一日より十一十日まで、「ペトロ岐部」オペラ公演とご一緒に溝部学園一行六名もローマにまいりました。

十一月五日バルマ市のオペラ座で、日本人による二百名からなる本格的なオペラは大成功裡に終わりました。

私は、その後ファッションの中心であるミラノ市の洋服学校を訪問しました。とりわけイタリアはヨーロッパのファッションの中心地であります。例年ビーコンで本学服飾デザイン学科のファッションショーを催していますので、ミラノ市及びローマでミセスや子ども達の洋服を数点購入して、この年のイタリアン・ファッションとしてご紹介いたしました。

十一月八日（水曜日）の午前中にパチカンのローマ法

王庁を訪問いたしました。

ペトロ・カスイ岐部師は国東のご出身で、クリシタン大名大友家が華やかな頃、国東岐部城の御家老様のご子息であった関係で、キリスト教に帰依され、一生を捧げられた方であります。

オペラ「ペトロ岐部」は、キリスト教布教のために大変苦勞をなさって尊い命を落とされた、ペトロ・カスイ岐部の一生を、本学の古長先生がオペラかされ、また本学の高場先生のお世話でローマ公演が実行された次第であります。

私たちがパチカンを訪れた日、広く荘嚴なローマ法王庁に日本人一行約二百名は最前に着席し、約八千人入る法王庁には全世界の人々で満席でした。

さらに、古長先生と私と田口さんは大理石の階段を上がり法王様がお手ずからロザリオを下さいました。

私は、紀家の関係から、紀家と関係の深い家柄であるペトロ岐部の系図の写しを持ってまいりました。法王様には私の作った「打出の小槌」刺繍もお土産としてさし上げました。

私が「大分県別府市で学校教育をいたしております、



法王様が日本においてる機会がありましたら、ぜひ大分にお立寄りください。ペトロ岐部司祭の銅像も国東に出来ていますのでお立寄りください」と申し上げました。

法王様も大変よろこばれて、「その教育と繁栄のため祝福あれ」と日本語で私にお言葉をいただきました。そして、さし上げた系図と刺繍は、パチカンの資料館に展示されるとのお言葉をいただきました。

私は法王様にお会いできて、この上ない幸せを感じつつ、一同感謝申し上げて法王庁を退出いたしました。

つぎにペトロ岐部司祭のお一生の一節を大分県先哲叢書の資料集より転載させていただきます。

ジャン・クラッセ著「日本教会史」パリ一六八九年判

第二巻第二〇書 二八章

日本人司祭ピエール・カスイの称賛すべき徳行 信仰



部岐ロペト

の篤きこと信心の深きことに関して、もっと称賛すべき人びとの一人は、日本人司祭のピエール・カスイであった。彼は大村の出身で幼少の頃からその他のイエズス会司祭達のセミナリオで教育を受けた。

府内様によって日本から追放されたのち彼はエルサレムに赴き、この世の救主の足跡を血と汗とによって神聖なものとなつてたいくつかの聖なる地を訪れた。いともの甚だ遠大なる願望をい抱くようになった。

彼はこの旅行を歩行で行なつた。数限りない骨折りと危険にもかかわらずインドとベルシャの広大な国々を横切つて行つた。彼の己れの信仰心を満たした後もローマに至りその地で（イエズス会）に入ることを請願した。

彼は（同会の）総会長によって入会を認められ、またさらにセミナリオにおいて勉学の経験があつたため聖職者の品級を受ける資格があると判断された。

その後彼は日本に送られた。日本に入ることが出来るために、彼はフランシスコ・ザビエルの子並にその弟子たるにふさわしい方策を身につけた。彼は奴隸になりまた徒刑囚のように素足で帽子も被らず二年間舟を漕いだ。こうして方策を用いて、彼は警備の者を欺き長崎に入つた。

そこでは拷問の恐ろしさのあまり信仰を捨てた多数の背教者を再び信仰に立ち上らせた。彼はその地から日本その他の地方に行き、その地でキリスト教徒を慰め多数の異教徒を改宗させ、またイエス・キリストの栄光のために酷しい拷問を受けた。彼はついに発見され江戸に連行され、その地で彼は一六三九年穴吊しの拷問を受けて死んだ。五十一才であつた。

と日本西教史に記述されています。心から先哲の歴史を謹みて記します。